

## 小児原発腔肉腫の一例について

金沢大学医学部第二外科学教室(主任 熊埜御堂進教授)

中 上 彬  
福 山 殖  
宮 崎 逸 夫

(受付昭和34年1月26日)

### An Instance of Primary Sarcoma of the Vagina in an Infant

AKIRA NAKAGAMI  
SHIGERU FUKUYAMA  
ITSUO MIYAZAKI

*Department of Surgery (II), School of Medicine, Kanazawa University*  
(Director : Prof. Dr. S. Kumanomido)

#### ABSTRACT

An unusual case of primary sarcoma is reported. A girl of seven months had tumors in the vagina and around the anus, which were surgically removed and proved by histological examination to be a primary sarcoma of the vagina and its metastasis in the perianal region.

#### 緒 言

腔肉腫殊に小児原発性腔肉腫は極めて稀にして殊に本邦においてはその報告僅か数例に過ぎず。

生後7カ月の乳児に発生せる腔腫瘍を剔出し、組織検査により肉腫なること判明せる一例を報告す。

#### 症 例

患者： 生後7カ月、女子

家族歴： 特記すべきことなし。

既往歴： 特記すべきことなし。

満期出産

主訴： 外陰部腫瘍

現病歴： 出産当時母親は患者の肛門周囲に小豆大、乳嘴状の腫瘍を認めたるも放置す。その後約3カ月にて雀卵大となり、6カ月にては鳩卵大となり、形も桑実状となれり。その頃より腔入口部にも大豆大の同様腫瘍を認むるが如くなりたり。入院前急に増大し鶏卵大となり、排便時僅かに疼痛あるが如く思わるるもその他機嫌良く発熱、出血、悪臭帯下等も見ず。

現症： 患者の發育、栄養、智慧等、年齢に相当し

て可良。頸部に脂漏性湿疹を認むる他、胸腹部には外診上異常を認めず。淋巴腺腫脹なし。

局所々見： 腔入口部に1個の大豆大の腫瘍露呈し、これは腔内深部より発生し後腔壁に附着せるものの如く全体としての長径約5糎、葡萄状を呈し表面淡紅色、所々に暗褐色の部あり。硬度弾力性稍軟にして實質性なり。

肛門には肛門を中心とし鶏卵大の腫瘍あり、分葉状にしてその底は広く色調、硬度等前者と同様なり。表面顆粒状を呈す。外尿道口、陰唇には変化を認めず。

患者幼にして腫瘍大なるため手術を二度に分けたり。

第1回手術所見： 肛門周囲腫瘍に対し手術を行な

う。即ち腫瘤底に近く、分割的にこれを結紮し切除す。断端よりの出血僅少なり。術後出血なく排便容易にして患児は好機嫌なりしも突然腔部腫瘍は細き茎をもつて腔入口部より露呈す。腫瘍を提挙するも何ら苦痛を訴えず。

第2回手術所見：腔部腫瘍に対し手術を施行す。患児幼にして完全なる剔出困難なるため茎部を結紮して切除す。茎部は腔後壁に附着し子宮腔部には関係なし。

術後出血少なく、患児は何等苦痛を訴えず。

剔出腫瘍：肛門周囲腫瘍は6.5cm×3.5cm×1.5cm、重量24g、分葉状にして剖面灰白色、光沢を有し稍々硬し。腔腫瘍は縦径5.0cm×2.0cm×1.5cm、細き頸部をもつ葡萄状を呈す。剖面前者と同じ。

術後1カ月にして腔部腫瘍再び増大し入院す。下肢の運動に際して疼痛甚しきが如く啼泣す。

局所々見：腔入口部に桜色、弾力性硬にして拇指頭大なる腫瘍露呈す。肛門部腫瘍は前回入院時より稍々大にして乳嘴状に發育し、紫紅色を呈し弾力性硬なり。腔より少量の汚穢なる分泌物あり。

第3回手術所見：腔前壁より、茎を有せる鳩卵大の腫瘍を結紮し切除す。後壁には拇指頭大なる腫瘍あり、基底部は直腸壁に強く着着し切除不可能なり。その他乳嘴状に腔壁より生ぜる腫瘍を3個切除す。

切除標本：腔前壁の腫瘍は長橢円形、表面は桜実色、弾力性硬靱。剖面は白桃色、無構造なり。その他腔後壁より生ぜる腫瘍は覆盆子状、白桃色乃至桜実色のもの多数あり、弾力性軟、水様の内容を有するものもあり。剖面は灰白色或いは紫色、無構造なり。

組織学的所見：乳嘴状に増殖せる腫瘍は外表面の大部を角化せる扁平上皮にて被われ、一部多列円柱上皮にて被られたる構造を示す。扁平上皮の部分において

は乳嘴化は著明ならざるも、その釘脚は不規則に深部に分歧し伸長せり。上皮の肥厚も著明ならず。腫瘍の間質は大体において2様の構造を示せり。即ち

1) 扁平上皮にて被われたる部の下層に多く見らるる構造にしてかなり鬆粗なる結合織存在し、紡錘形の線維細胞様の細胞散在し、基質はヘマトキシリンに淡青色に染まり、且つムチカルミン染色にて淡赤染す。かかる粘液の存在を思わしむる浮腫状の組織の下層には膠質線維の多き組織存在するも、線維の走行不規則にして粘液性の浅在の組織に移行せり。この部の密なる線維束も亦浮腫状なるも、線維束間にかなり細胞成分の多き鬆粗なる組織見らる。しかし両者は漠然と移行せり。この部に見らるる細胞は線維芽細胞型の核染色質のかなり多き紡錘形の細胞にして巨大細胞を見ず。

2) は主として多列円柱上皮の下層に見らるる構造にして細胞成分はかなり多く、細胞は多様に富めり。又異型性を示すこと強し。この部の線維はかなり繊細にして浮腫状を呈することも前者より強く、基質はヘマトキシリンに淡青染する多量の粘液様物質を有せり。この物質はムチカルミン染色にて淡赤染す。細胞は紡錘状或いは桿状の核を有する線維芽細胞様の細胞主体なるも、核の卵円形を示すもの等もこれに混じ、クロマチンに富むかかかる細胞は核及び胞体の大小不同かなり著明なり。これらの細胞のあるものはその胞体が星芒状の突起を有するものも少なからず。又、胞体のエオジン好性を示す2乃至5核の巨細胞の出現を見ることも稀ならず。これらは前記細胞群に混じて存在するも、この巨細胞は筋組織の破壊又は変性にもとづく筋原性の巨細胞と考えらる。いずれの部分においても印環細胞等の構造は全く認め得ず。

## 考 按

小児原発性腔肉腫は極めて稀にして1868年 Heckford の報告を嚆矢とす。Veit (1906) は40例を、Frankel (1914) は50例を、次いで A. Labhardt (1924) は60例を蒐集し発表せり。その後 L. Nürnbergger (1930) は従來の文献を総括し病理形態学並びに臨床方面に関する詳細なる研究を発表せり。本邦においては未だ数例の報告あるのみ。

小児原発性腔肉腫の本態は成人と小児において甚だ相違する点あり、ために Pick, Wils, Veit 等は両者を

區別す。これに対し Westenberger, Kehrer, Welling はその臨床症状、経過において異同を認めず形態学的の多少の相違は自然的なるものとし、且つ發生年齢に関し両者境界の漠然とせる理由をもつてこれに反対す。しかし今日においては多くはこれを區別し、初經来潮を以て境界とす。

發生部位は腔前壁に多く側壁に少なし。

發生年齢は生後より5年迄に多く、稀には本症例の如く分娩時に認めたるものもあり。

症候は成人においては貧血羸瘦を来たすも、小児腔肉腫においては然ることなく腫瘍の外陰部に露呈して初めて家族の気付く所となること多し。外觀は多種多様なるも息肉状又は葡萄状を呈すること多く成人腔肉腫の瀰漫性に増殖するに反し限局性結節をなすこと多く茎を以て基底層に連なりポリープ様となる。末期にては茎の基底層及びその周囲に瀰漫性に浸潤す。發育蔓延は迅速にして腔内に充満す。多くは前方にひろがり、たとえ後壁に生じたるものにも好んで前方に拡大す。即ち膀胱腔中隔或いは膀胱に侵入す。その他直腸腔中隔、子宮頸部、腹膜面に拡大す。転移は成人と趣きを異にし遠隔臓器への転移極めて少なく、浸潤性増殖をなす。本症例の如きはその發生部位が腔後壁な

るため直腸粘膜への浸潤による肛門腫瘍と見做し得。組織的に腫瘍細胞は多種多様にして円形細胞肉腫、紡錘形細胞肉腫、円形紡錘形細胞肉腫、線維肉腫、粘液肉腫、横紋筋肉腫、混合腫、肉腫様内皮細胞腫、等あり。なお多数において基質中に横紋筋線維を含有す。

この線維は胎生期組織の迷芽、球海绵体筋より生ず等といわれ、副所見と見る学者もあり。又滑平筋線維も認めらるることもあり。

發生原因につきては中胚葉組織に由来すとなす説、迷芽説、結締織細胞の化生によるとなす説、体質、既往疾患殊に麻疹、百日咳に続発すとなす等、種々あるも未だ確定せず。

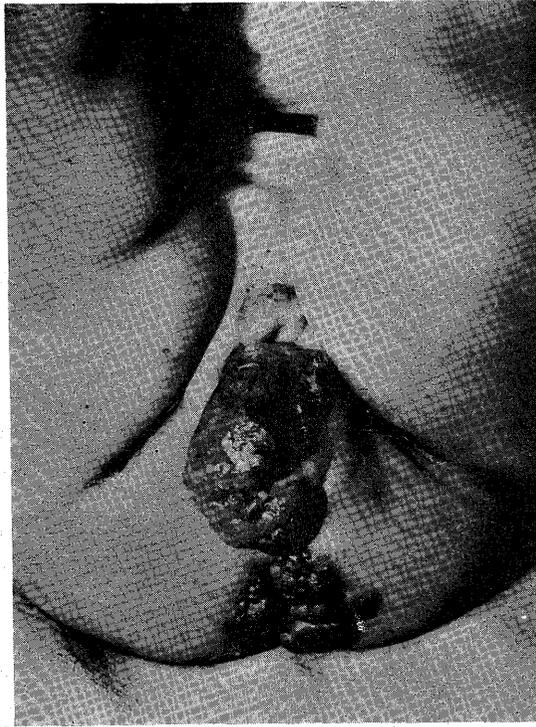
## 結 語

生後7カ月の乳児に發生したる腔並びに肛門腫瘤を剔出し、組織的検査の結果、腔肉腫なることを明らかにし、肛門腫瘤はその転移と考えられし稀有なる一例

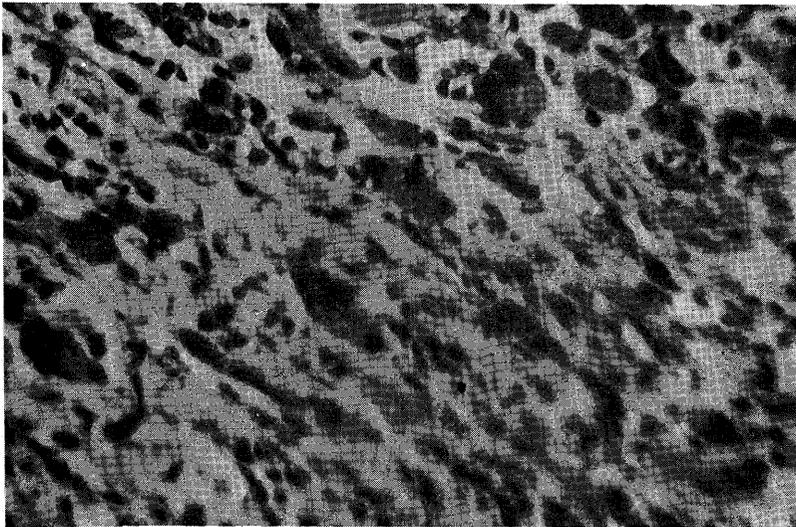
を経験せり。これを報告し併せて簡單なる考按を加えたり。

## 参 考 文 献

- 1) 安藤畫一：婦人科，各論，第Ⅲ版。
- 2) 杉田隼人：治療学雑，2卷，10号，S. 1262.
- 3) 丸山・中村：産科と婦人科，Vol. 5, Nr. 10.      4) Gos. Armann：A. f. Gyn. LXXXII, S. 746, 1907.      5) G. Döderlein：Zbl. Gyn. Nr. 37, S. 2350, 1930.
- 6) F. Koliska：Wr. Kl. Woch. Nr. 6, 1889.
- 7) v. Mikulitz-Radecki：Zbl. Gyn. Nr. 33, S. 1962, 1933.      8) Nagel：Zbl. Path. S. 129, 1933.      9) Ludwig Nürnbergger：Veit-Stoeckel Handb. d. Gyn. Bd. V. Hf. 2.
- 10) Ludwig Nürnbergger：Veit-Stoeckel Handb. d. Gyn. Bd. IV. Hf. 2, 2 Teil, S. 686.
- 11) L. Pick：A. f. Gyn. XLVI, S. 191, 1894.
- 12) Mc. Jos, Farland：Zbl. Gyn. S. 915, 1911.



図I 膣部及び肛門部に露出せる腫瘤



図III 紡錘形細胞 細胞核，胞体の大小不同（強拡大）



図II 腫瘍表面 多列円柱上皮にて被わる細胞成分に富む(弱拡大)



図IV 腫瘍表面 重層扁平上皮にて被わる。